

り圓錐形の角を有し南部地方にあり、次にコブラの台灣に産することは曾て耳にせしが目下同島に滯留する宣教師 Mackey 氏の蒐集品中に實物を見たり同氏の談によれば此毒蛇は決して台灣に稀ならずと台灣産動物に關する報告書中に之を記さざるは又一奇なり澎湖島に一種の美なる鳩あり全身白くして形小く尾は尖りて肢と嘴とは共に紅し實に愛玩するに足る先年迄は可なり其數も多かりしか行通の瀕繁と共に人の携へ去ること多きにや今日に至りては其數を減したり此鳩は支那人の畜養して造りたる變種とも思はれず佛人などか輸入し其後繁殖せし者にあらざるなきか次に恒春地方は動植物に就ては台灣全島中特色を有する地方にしてハンダヌスの類大に繁茂し羽族多く群棲し山中には蒼色のキツ・キ (*Cyanops ucbalais gould*) あり又有名なる *Euplocamus swinhoe* と稱する美色の雉子に似たる鳥も此地方には稀ならず此鳥は北部にては高山に棲み南部の「テラソ」邊にては小山にも棲み恰も内地に於ける雉子の如し又英人の所謂ムンチャックと呼ぶ小鹿 (*Cervus reevesi*) は此地方に棲息す性甚た慧敏にし

て土人は弓を用いて之を捕ふ台灣猿 (*Macacus cyclops*) は南部地方にては群棲し榕樹の枝梢を渡り其遁逃するや甚だ迅速にして殆ど其影を認むる能はず只颯々の聲を聞くのみ南部地方の偉觀とも稱す可きは艶麗なる蝶類に富むとにして其種數の多き又其個數の境多なるは蝶類専門家の特に來りて研究するの價値は充分に是ありと茲に講話終りて標本に就ての説明等あり午後四時半散會す會者四十有二名

●申譯の一言 先般來紀州の X Y 生君を始めとし無慮百數十名の購讀者諸君より續々質問の手紙が着した、其文言は各々異れど、其意に至つては孰れも同じで有る、皆動物學雜誌は今年一月より代價は二倍に飛び上つたが紙數は段々と減じて行くは如何なる理由であるか、其譯を承りたいと云ふ御尋ねである、之に對しては唯誠に御氣の毒である、誠に申譯がないと謝るより外には致方が無ひ、依て一言申譯のない譯を述べて置かう、質問書を送つた方の中で最も御丁寧なるは在姫路の A B 君である、同君は質問書の終りへ左の表を添へられた、

第二百二十三號	(一月分)	四十頁
第二百二十四號	(二月分)	四十頁
第二百二十五號	(三月分)	三十八頁
第二百二十六號	(四月分)	三十八頁
第二百二十七號	(五月分)	三十四頁
第二百二十八號	(六月分)	三十八頁
第二百二十九號	(七月分)	二十八頁
第二百三十號	(八月分)	二十二頁
第二百三十一號	(九月分)	十六頁
第二百三十二號	(十月分)	十八頁

左の表は實際の事實を表はしたものの故之に對しては唯恐れ入るの外はないのである、

扱何故に斯く紙數が減り行くかと云ふに其理由は甚だ簡單である、即ち編輯人の勢が衰へたのである、今年一月に初めて色摺の石版圖を出した頃は中々勢が善かつたが五六ヶ月もやつて居る内に勢が抜けて今では到底編輯の任に堪へぬ様に衰へたのである、言を換ればヘコ垂れたのである、

されど榮枯盛衰は浮世の常なりと云へば雜誌の紙數の一時減する位の事は少しも氣に掛けるには足りない、紙數の今減するは即ち後に増す爲の準備である、恰も尺取り蟲か伸びる前に必ず屈するのと同じ理由である、斯く考へれば寧ろ慶すべきことかも知れないと思ふ、

最早今年も残り少くなつた、年が改まれば天地萬物改まらざるものは無ひ、年が改まりさへすれば編輯掛りの勢も必ず頓に盛になつて、本誌も一段と立派なものに成るは疑ふべからざることであらう、

とは云ふものの今年の夏頃より甚だ薄い雜誌のみを出したるは購讀者諸君に對しては誠に申譯のない次第である、依て一言御詫びを致すのである、

●會員諸君に告ぐ 此程より往々會費を爲替にて小生へ宛御送付に相成候方之あり候へど、小生は一切會費に關する事務は取扱申さず候故何卒以後は必ず會計主任の方へ御送りに相成様願候

丘 淺次郎、